

アトリエ 琉游舎 だより 237号

アトリエ琉游舎 ryuyusha.com/琉游舎for healing <https://toi101izuru.wixsite.com/mysite-3>

2026年8月12日発行

戦争を知らない子供たちの夏

●今年も8月15日がやってきます。私はもちろん「戦争を知らない子供たち」の一人です。敗戦後81年の熱い夏がやってくるまでに、どれだけ多くの戦争を知らない子供たちが生まれたことでしょうか。81年間に熱い夏であった8月15日は、その熱さも冷え込む一方となり、単なる酷暑日の暑い夏になってしまったようです。文字通り「戦争を知らない子供たちの」暑い夏。

●今でも耳にする”♪戦争を知らない子供たち“は発表後50年以上の長い年月反戦歌として歌われ続けてきました。しかし発表当時は日本の侵略戦争が終わってまだ25年。若者が平和を語ると、戦場を知る親世代や焼け跡派の大人たちから「戦争の恐ろしさも知らない子供のくせに」と批判が来る時代でした。今でこそ反戦歌として定着していますが、当時は「軟弱だ」「ベトナム戦争のさなか、戦争を知らないとは不謹慎だ」と批判をされたようです。

●戦争を知っている人は戦争を語る資格があり、知らない人は語る資格がないとの批判に聞こえます。戦争は知らない方がいいに決まっていますが、今や、語る資格のある人はどれだけ残っているでしょう。いずれ戦争は、体験をではなく、戦争を想像することでしか語ることができない時代となるでしょう。その時私たちは♪平和の歌を口ずさみながら♪の歌詞のように、憎しみや利害ではない普通の生活の中で平和を受け継ぐことができるのでしょうか。

●戦争は被害者の側から語られても、戦争を起こす権限を持った敗者側の権力者から語られることは殆どありません。語られなかった事実はいずれ書き換えられ、それが真実として流布されるようになるのではないのでしょうか、それが現在の日本の戦争と平和を巡る状況を作っているように思われます。テレビモニターが映す、様々な地域での今ある戦争は、カメラと衛星とを經由して私たちの目に触れるまでに、仮想現実（バーチャル）となり熱を失っていくようです。熱い夏を知らない「戦争を知らない子供たち」は、その冷め切ったモニター越しの戦争を見て♪平和の歌を口ずさみながら♪歩き続けることができるのでしょうか。

写経会 9/6 (日) 13時半 読書会 8/18・9/8 (火) 13時半

狂言綺語…熱い夏を繋ぐ

夏休みはおじいちゃんおばあちゃんの忙しい季節です。我が家には8月に入って小1、小2、小4の三人の孫が一週間から10日、親元を離れて預けられています。高齢者二人の静かな日常から、孫たちの動きに右往左往させられるドタバタの日々が続きます。この期間は子供を預かっているという責任の緊張感から、何とかこの喧噪の日々を乗り越えることができるでしょうが、帰った後の静けさと虚脱感はひとしおです。あと何回くらい孫を預かることができるかは、体力的に定かではありませんが、恐らく中学生にもなると、孫たちも祖父母の家で夏休みを過したいとは言わなくなるでしょう。60年の歳の差は、食事の嗜好から興味、思考回路、行動様式まで何もかも異なって当然ですが、ここまで違うのかと驚くばかりです。歳を重ねること、成長していくことは世代間で引き継いでいくべきことを引き継ぎ、不必要なものを捨て去って更新していくことの繰り返しなのでしょう。何世代繰り返し替えていけば、当初の世代が引き渡したものが更新され100%全く異なったものになっているのでしょうか、そんなことを考えさせられる孫と過す夏休みの10日間です。

私が僧侶になって初めて「僧侶として生きることはなんであるか」を理解したこと、そしてそれが私が僧侶として生き続けるためには不可避、不可欠であり、全てであるとの考えに至った認識が、「ホトケのいのちを繋ぐ」ということです。「いのちを繋ぐ」ことを具体的に規定することも、誰もが疑問の余地のない定理として示すことも不可能です。なぜならそれは、各々が各々の安らぎの処へと至る道を、各々の選択に従って日々生き続けることだからです。各々が選択した道の歩き方全てが、「仏の教え(法)」なのです。ですから有史以来連綿と繋がれたいのちは、各々の選択したいのちの継承によって、生きとし生けるもの、森羅万象のいのちとなって、今ここにあるのです。その故に、私たち自身の今あるいのちだけでなく、他者のいのちも自分自身のいのちと同様に慈しむことが、私たちが生きることの全てとなることのできるのです。これが「ホトケのいのちを繋ぐ」ことであり、お釈迦様の弟子として信行の道を生きる私の自覚なのです。

以上のことを私は今回で220回に渡り、この狂言綺語の欄で書いてきました。それは私が日々をこの自覚のもとに歩み続けているかの備忘録であり、反省録でもあります。最初からこの自覚に基づいて書き始めていたわけではありません。私なりの信行の経験から導き出された反省と発見の道筋が少しずつ言葉に置き換えることができるにつれて、自覚が形作られたと言うところが本当のところだと思われまゝ。しかし、今読み返してみても、その自覚へ至る道筋は、最初から一本の道筋としてすでに与えられていたのではないかと思えるのです。なぜなら言葉や表現は違えども、私は初期から常に「いのちを繋ぐ」ことについて書いてきたからです。その過程は「いのち」がホトケのいのちであり、私たちのいのちであるということ、つまり私とホトケはひとつであるという考えに至る一本の道だったのです。そしてその道は私が自ら切り開いたものでは決してありません。ありのままに歩もうと常に心がけ、しかしその通りに歩むことができていないのではないかという恐れにも不信を抱かず、これもありのままの道と信じて進んでいく先に辿り着く安らぎの処です。そのところへ、生きとし生けるもの、有情、無情、森羅万象の全てが辿り着こうと願い誓い歩み続けることができれば、全てが互いを慈しみ合い、尊重し合うことができるようになるはずなのです。

互いを慈しみ合い、尊重し合うことができれば、生きとし生けるものは互いを憎しみ合ったり、殺し合ったりすることはできないはずで、日本人が自らの意志で他者を蔑み、殺戮する戦争は81年前を最後に起こしていません。その最後の日となった熱い夏から、私たちは熱い夏のいのちを今につなぐことができているのでしょうか。このいのちは主義主張や信条や利害や感情で繋ぐものではありません。自分自身を慈しみ尊重することで、自然と培われる智慧と精神によって繋がれるものです。智慧と精神は私一人単独で存在できるものではありません。常に他者との関係性の中で、私の智慧と精神のありのままの発露が、**自**ずから他者の智慧と精神に共鳴して**然**らしむ、**自然**(じねん)の共鳴が、他者をも慈しみ尊重する智慧と精神となっていくのです。これは理想論や夢物語ではありません。心底から私はありのままに生き続けたいと望み、誓い、行いさえすれば、私は他者との自然の共鳴があると信じています。なぜならそれはホトケの慈悲だからです。

仏の慈悲をその時代、その社会に合わせて繋いで行くためのキーワードが「カミとホトケの出合い」と「選択と摂取」「保守」です。私が信行を言葉に置き換える過程で言語化することのできた、ホトケの教えです。今までの繰り返しになりますが、日本古来の八百万のカミと、印度、中国を経由して日本にもたらされたホトケが出会ったとき、日本独自の文化、社会が生まれました。カミは日本人の精神を、ホトケは智慧を形成してきました。その精神と智慧を繋いで行く努力を現在まで2000年近く続けてきて、今ここにある日本があるのです。その過程で社会や意識の変化に合わせて「選択」を行なってきました。その選択はそれ以外を排除する選択ではなく、されなかったものも摂取する選択です。カミとホトケの慈悲(精神と智慧)が排除でなく摂取することを望んでいるのです。だからこそ、私たちに引き継がれた社会を私たちは次の世代に繋ぐ義務があります。なぜならそれが私たちのアイデンティティそのものだからです。その教えを繋ぐための基本理念が「保守」です。保守すべきものを選択し「保守せんがために改革」し続けて今があるのです。

保守は進化や革新に反対し、既得権益を守ろうとする立場と思われがちです。しかし私は保守を、変化に対応するために事実を正しく認識し、選択摂取して改革する考えが本来の「保守」と考えます。そうでない巷に溢れる偏狭ナショナリズム的言動は似非保守、保守反動と呼ぶべきものです。その反動者が、熱い夏を熱いままに繋ぐことを無視拒絶し、また新たな熱い夏を再現しようと目論んでいるように思えてなりません。